

反ハイデガー的転回のおとで

ヨナスにおけるヒトクローニングへの実存主義的批判

氏名 戸谷 洋志 (大阪大学)

本発表の主題は、ドイツ出身のユダヤ人哲学者ハンス・ヨナス (Hans Jonas 1903-1993 年) におけるヒトクローニングへの実存主義的批判を、ヨナスとハイデガーの思想史的連関のなかで解釈することである。

ヨナスとハイデガーの思想史的連関についてはすでに多くの先行研究が蓄積されている。それらの間で概ね共有されているのは次のような解釈だ。ハイデガーの弟子であったヨナスの哲学は、前期のグノーシス主義研究、中期の哲学的生命論、後期の未来倫理の三つの段階に区分される。グノーシス主義研究において、ヨナスはハイデガーが『存在と時間』で展開した実存分析の手法を応用し、古代神話の解釈を試みている。しかし第二次世界大戦以降、ハイデガーがナチスドイツを支持したことによって、ヨナスはハイデガーの哲学に対して急速に批判的な態度をとるようになる。1960年代から70年代にかけて形作られた哲学的生命論において、ヨナスは『存在と時間』を現代社会の倫理的なニヒリズムの象徴として解釈し、また同書において身体現象が軽視されていることを批判する。その後の未来倫理において、ヨナスは身体傷つきやすさに立脚した倫理学の基礎づけており、それはハイデガーを批判的に克服する試みとして解釈されうるものである。このように、ヨナスは第二次世界大戦以降に明らかな「反ハイデガー的転回」¹を遂げている。

しかし、こうした枠組みでは捉えることのできないテキストがある。それが『技術、医療、倫理』(1985年)におけるヒトクローニングへの実存主義的批判である。ヨナスはここで、かつてのグノーシス主義研究を彷彿とさせるような仕方で、ハイデガーの実存思想を援用することによってヒトクローニングの問題を指摘する。また興味深いのは、ヨナスがそうした批判の帰結として「知らないでいる権利 *Recht auf Nichtwissen*」を導き出している、ということだ。ヨナスによって初めて提唱されたこの概念は、その後の生命倫理をめぐる言説に多大な影響を与え、今日でも多くの論客たちによって重視されている。

以上を踏まえ本発表は、ヒトクローニングへの実存主義的批判を、「反ハイデガー的転回」のおとでヨナスが再びハイデガーへと歩み寄った例外的な思想として解釈し、その主張を『存在と時間』との連関から再構成する。またそれによって、ヨナスを介して紡ぎだされる『存在と時間』と「知らないでいる権利」との繋がりを指摘することを目指す。

¹ 品川哲彦「技術、責任、人間 —ヨナスとハイデガーの技術論の対比」『Heidegger-Forum』vol.7、ハイデガーフォーラム、2013年、pp. 110-122、p. 115